
眠りの国の王子と魔女

キサラギハルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠りの国の王子と魔女

【Nコード】

N2419L

【作者名】

キサラギハルカ

【あらすじ】

アーシエは、まだ100年ほどしか生きていない魔女。各地を旅していた彼女は、シエルサード王国を統治するブランジェット王家に伝わる呪いの話を聞き、興味本位で立ち寄る。

滞在期間は一週間程度のもりだったが、偶然にも彼女に魔法を教授した『師匠』と再会する。この『師匠』、なんと出世して『宮廷魔術師』として働いているらしい。旅行資金を貯めるため、しばらくの間『宮廷魔術師見習い』としてお城で働くことにしたアーシエが出会ったのは

もつすぐ18歳の誕生日を迎える王子、クラウドと王国の歴史に強く根付いた「呪い」だった。

プロローグ

その日、雲ひとつない晴天にも関わらず、王国は深い悲しみに包まれていた。

国王がわずか18歳という若さで呪いの力の前に倒れたからだ。予言されていたこととはいえ、聡明で民のことを愛していた王の時代の早すぎる終わりに、多くの民は悲しんだ。在位期間はたった2年という短さだった。

彼に降りかかった呪いとは、

死ぬまで眠り続けること

国王が呪いの力に倒れるたびに、人々は噂しあった。

王国を統べる王家　　ブランジェット王家は呪われている、と。

魔女、呪われた国へ 1

「あんだ、もしかしてシエルサード王国に行くのかい？」
「え？」

真夜中近くにたどりついた宿の食堂で、白い寝間着姿の女主人に出されたスープを食べようとしていた少女は、右手でスプーンを握ったまま、きよとんとした表情をカウンターの向こうにいる女主人に向けた。少女の反応は予想外だったのか、女主人が目を見開く。

「いや、だって・・・あんだ、魔女だろう？」

女主人はカウンターの上のランプを少女のほうに押しやった。どこかぼんやりとした、しかし至近距離では眩しい光に少女は目を細め、眩しくない程度の距離に移動させてから頷く。

「そう、だけど」

ランプの明かりの中に、肩甲骨あたりまでの真っ直ぐな金髪と緑色の大きな瞳、身長は160センチ弱、黒いとんがりぼうし、部屋の中なので、脱いではいるが、黒い長袖のワンピースの少女の姿が浮かびあっていた。少女、アーシエは女主人に指摘されたとおり、魔女である。

「シエルサード王国のことを知らない？」

その問いに、アーシエは首を横に振った。

「世界でも類を見ないほど、魔女と魔法使い、魔術師が保護されている国でしょう？ 知ってますけど。教科書にも載ってる国だし。それ以外に何かあるんですか？」

すらすらとそこまで言い終えると、スープをすくって口元に運ぶ。口の中に広がる甘くて優しいカボチャの味に息をついていると、肩が凝っているのか、女主人が首を回しながら言った。

「シエルサード王国を治めているのはブランジェット王家なんだけどね、あの王家は呪われてるらしいよ。まあ、私も人から聞いた話だけどね」

「呪われてる？」

首を回していた女主人が、肩をとんとん拳で叩く動作に変えながらつけたす。

「王子様だけが呪われているんだってよ」

「ふーん」

アーシエは、残り僅かとなったスープを飲みこんでから返事を返す。ごちそうさま、と呟くとスープ皿はあっという間に女主人の手によって片づけられた。

「おいしかった。夜遅いのに作ってくださってありがとうございます。ありがとうございました。」

女主人が笑顔で首を横にふる。

「いいんだよ。そうだ、朝はどうする？食べていくかい？」

「いいえ。朝は結構です。ありがとうございます。・・・部屋はどこでしたっけ？」

「上がってすぐ左の部屋」

「左ですね。おやすみなさい」

アーシエは、カウンターの上に乗せておいたとんがり帽子と隣の椅子の上に置いておいた唯一の手荷物である長四角の黒バッグを持つと、階段へ向かった。

「おやすみ。階段は少し急だから気をつけて」

女主人が言ったとおり、少々角度のきつい階段ではあったが、アーシエにとっては何の問題もない。おそらく、アーシエが泊まれる安い宿の中で完璧なところはない。しかし、アーシエは今まで特に気にしたことはなかった。一晩泊って眠れば次の場所へ移動する。基本的に同じ場所には留まらない。いつの間にかそうになっていた。それがアーシエの旅をするうえでのルールだ。

アーシエは、女主人に教えられた部屋のドアを開けた。当然、部屋の中は真っ暗だったがベッドのそばにランプと小さなテーブルと椅子が置いてあるのは魔女であるアーシエにはすぐ見えた。魔女は夜目がきくのだ。部屋に鍵をかけてから、ランプのそばに置いてあった火打ち石でランプの中のスロウそくに火を灯す。そして、黒いバツグから茶色の布の塊を取りだすと左手の上に乗せて短い言葉を唱える。ただの塊に見えたそれは、アーシエが唱え終わると同時に膨らんで寝間着になった。衣類はかさばるため、魔法で圧縮して持ち運ぶのを最初に始めた魔女が一体誰だったのか。そんなことは知らないが、アーシエに限らず、多くの魔女や魔法使いたちはこうやって旅をしている。

寝間着に着換えていると、ふわりとあくびが一つ出た。ワンピースをたたんで椅子の上に置き、ベッドの中に潜りこむ。思っている以上に疲れていたらしく、まぶたがすぐに落ちそうになるが、その前にアーシエには考えなければならなかった。明日からどうするか、だ。

(お金も底をつきかけてるし・・・)

旅を続けるうえで資金がないのは一番の問題である。最悪、行き倒れる危険性もあるからだ。

(やっぱり、ここはシエルサードかなあ)

アーシエは脳裏に地図を思い浮かべた。現在地はイヴァネス国の外れでこのまま真っ直ぐ進めばシエルサード王国・カサンディア王国・モーリス帝国へ通じる国境を通ることになる。

(・・・やっぱり、シエルサードだよな)

仕事をできるだけ早く得られる可能性が高いのは、魔女・魔法使い・魔術師たちを最も保護しているシエルサードだ。

(モーリスとカサンディアにはまた後で行くとして・・・シエルサードの呪いの話って本当なのかなあ?)

実際に実行してみたことはないが、アーシエも魔女である以上は『呪い』に興味はある。しかし、女主人が話して聞かせた話は子ど

も向けの本に載っけいそうなおとぎ話に似ているのだ。

(第一、王子ばかりがって・・・結構な呪いじゃない？でも、そんな話今まで一度も聞いたことなかったし・・・)

ここで、またひとつあくびが出た。アーシエは、ひとまずこれ以上考えることをやめて、ランプの光を消すとまぶたを閉じた。

魔女、呪われた国へ 2

翌朝、アーシエは早い時間に起き、荷物をバッグの中にまとめる
と女主人に宿を出ることを告げた。女主人は陽が昇ったばかりとい
う理由で引き留めてきたものの、行き先を告げると納得したかのよ
うににそれきり何も言わなかった。

ここからシエルサードへの国境までは徒歩で半日ぐらいかかるた
め、引き留める理由はなくなったのだろう。

少し古びてきた黒いブーツの靴ひもをしっかり結ぶと、アーシエ
は礼を言っただけで宿を出た。外に出ると、陽が昇って青く染まり始めた
ばかりの空が広がっている。そして、ワンピースの上から羽織った
大きめの灰色のシヨールでも覆いきれなかった足の部分に、ひんや
りとした空気が触れてくる。まだ十分に寒いといえるほどの冷たさ
だが、イヴァネスに初めて来たときよりはずっと和らいでいた。世
界地図で北に位置するこの国は、さらに北に位置するシエルサード
の次に春の訪れが遅いのだ。

迷うことはない、看板も立ってるからと教えてくれた女主人の言
った通り、分かれ道に出会う度に『国境はこちら』と表示された木
の看板が立っていた。まだそんなに歩いているわけではないので、
当然、『国境まであと少し』とか『国境までもうすぐ』といった表
示が書かれた看板が出てくるはずはないのだが、『国境はこちら』
のワンパターンだけだとぐんと距離感を感じてしまう。ワンパター
ンなのは看板だけではなくて、風景も同じだった。舗装はされてい
ないが石ころひとつ落ちていない道、その両脇に真っ直ぐに並ぶ、
葉をつけ始めた木々。

「まだまだかぁ・・・空が飛べたら、なんて考えちゃう」

何十回目の曲がり角を通りすぎ、何十枚目かの『国境はこちら』の看板を見たところで、アーシエは青い空に向かって疲れたように呟いた。

伝説では、魔女は箒を使って空を飛ぶのだという。初めてこのことを知ったとき、アーシエは笑いがとまらなくなつた。実際は、自力で空を飛べる魔女は存在しない。魔女に限らず、魔法使いも魔術師も空を飛ぶことはできない。移動は、徒歩か馬車などを利用するか、魔法陣を使って転移するか、である。馬車を利用するには当然お金がかかるし、その金額は決して安いものではない。魔法陣を使うにも、転移先の魔法陣の形を知らないと使えない。アーシエはシエルサードの転移用魔法陣の形を知らないため、この方法も使えなかった。となれば、残るは徒歩しかなくなるわけである。

「まあ、愚痴を言つてたつてしょうがない。馬車に乗って行って無一文でシエルサードに着くよりはいいんだし。ええと、着いたらまずは仕事を探して　シエルサードだったら短期でも条件のいい仕事がありそう。イヴァネスはどういうわけかダメだったし・・・でも、ひよつとしたら、シエルサードには魔女や魔法使いたちが溢れてるかも。そういう状態だったらさつさとモーリスやカサンディアに移動しなきゃ。移動したところで、仕事が見つかるって保障はないけど　ん？」

アーシエは唐突に立ち止まると後ろを振り返つた。長めの金髪もその動きに合わせて揺れる。後方に見えたのは馬車だった。それも、大勢の旅行者を乗せる乗合馬車ではなく、貴族の馬車らしい。近づいてくるに従い、二頭の白馬が引いている車体がひどく飾り立てられたものであることに気づく。アーシエは道を譲るために道の端に寄つた。馬車が横を通り過ぎるときに、優美な曲線の白塗りの車体は外側だけではなく窓枠も金で縁取られ、全体に何かの像が彫つてあるのが見えた。

「おとぎ話に出てくるような馬車って感じ」

それも、お姫様が乗っているタイプである。女の子ならば誰もが

憧れるように、アーシエも一度くらいはあんな馬車に乗ってみたいと密かに思っていた。現実には、金銭的に無理なのだが。

馬車はガラガラと車輪の音を残しながら、あっという間に遠ざかっていった。まだまだ道は続いているようで、見慣れた看板らしきものがこの少し先にまたひとつ立っているのが見える。きつとまた『国境はこちら』だろう。愚痴は言わないと決めたものの、ふうとため息が自然にこぼれ落ちた。

結局、国境に辿り着いたのは昼を少し過ぎたころだった。併設してあったカフェで、安いサンドイッチとコーヒートのセットを食べてからシエルサードへの入国手続きをし、手続きが終わってから入国したときにはすでに夕方になっていた。

出会いと再会 1

『シエルサード王国へようこそ。シエルサードは、自然との調和を目指した美しい国です。安全で優雅な時間をお約束します。どうぞシエルサードでの時間をゆつくりとお楽しみください』

国境で入国手続きが終わった際に渡された二つ折りのパンフレットの中に、でかでかと書かれていた文章である。文章の横にはカレン王妃の肖像が載せられていた。口元に微笑みをたたえた王妃は、とても美しい人だった。しかし、肖像画は王妃だけで、呪われているという王子の分はない。

「でも、お母さんの王妃様がこれだけ美人なんだから、王子様も顔はよさそう」

滞在中に拝見する可能性はないだろうから、想像するしかないのだが。

アーシエは、魔女協会へ向かっていた。国境で渡された目印つきの地図とにらめっこしながら、魔女協会があるメインストリートを目指してひたすら歩く。石畳の道は疲れた足に優しいとはいえなかったが、泊まる宿も決まっていけない以上、宿の斡旋もしてもらわなければならず、とにかく早く魔女協会に辿り着く必要があった。

「ええと この角を右に曲がれば」

メインストリートである。魔女協会はメインストリートの奥にあるらしく、地図の目印も通りが一番端のあたりについている。急ぎ足で角を曲がると、夕暮れ時にも関わらず、宿屋やレストラン、居酒屋が集まっている通りには人が溢れていた。その中にはもちろん黒いとんがり帽子を被った魔女や黒いローブ姿の魔法使いたちの姿もあった。割合からみて、人間たちと半々といったところだろうか。彼らは、人間たちと笑顔で語り合い、酒を酌み交わしている。

「やっぱりここはシエルサードなんだ・・・」

半ば呆然としていると、空気が微妙に変わった。危ない気配はし

ないものの、歩くスピードを少しだけ緩めて左右を見回す。柔らかな風が頬を撫でていったような感覚を覚えた瞬間、ふわりと魔法が空から降ってきた。人間の目には見えない星屑のように降ってきた魔法の向かった先は、メインストリートのおちこちに立つ街灯だった。

「綺麗ねえ」

音もなく一斉に灯った街灯に、隣から声上がる。

「綺麗ですねえ」

同じ言葉で返すと、その誰かは「あらあら」と言って笑った。声が聞こえた方に視線を移すと、白髪をきつちりと後ろでまとめ、ほつそりした顔に小さな眼鏡をかけた老婆がいた。着ているものは暗い色の簡素な服だったが、どこか気品を感じさせた。

「ごめんなさいね。魔女さんだと気づかずにおしゃべりしてしまったの。許していただけるかしら？」

柔らかい声に、アーシエは笑って頷いた。

「怒ってなんかいません。だって、本当に綺麗じゃないですか」

老婆は微笑むと、街灯のあるほうを見上げた。

「毎日、同じ光景を見ているのに飽きないのよ。魔法ってやっぱり不思議よねえ」

「へえ、毎日」

老婆の視線の先の街灯は、ランプの炎のように揺らぐことなく一定の明るさを保っている。

「ちなみに、夜が明けると明かりは消えるんですか？」

アーシエの問いに、老婆は少し驚いた様子を見せてから頷いた。

「ええ。あなたひよっとしてこの国に来たのは初めて？」

「はい。さつき着いたばかりです」

「そうだったの」

老婆は、丸まった猫の形をした看板をぶら下げてある家の前で立ち止まった。猫の体には、『黒猫亭』と書かれている。名前からすると食堂か居酒屋といったところである。水色の壁に真っ白なドア、

ドアの左右に白い窓枠の小さな窓が一つずつのシンプルな外見の店だった。

老婆はドアを開けると、アーシエを振り返り、再び微笑みを浮かべて言った。

「シエルサードへようこそ。可愛い魔女さん。うちは宿屋を兼ねた食堂なの。時間があつたらぜひ来てちょうだいね」

その言葉に、アーシエはにっこり笑って頷いた。

ここまで人で混雑していない昼間だったらまだ遠くを見通せるのだろうか、と考えてしまうほどメインストリートは長かった。

しかし、メインストリートの奥まで歩いて地図通りの場所に魔女協会があるのを見つけると、アーシエはほっとした。

そして、魔女協会の隣の居酒屋を通り過ぎようとして店の中から出てきたローブ姿の誰かとぶつかった。

「ちょ　?!」

すんでのところで転ばずにすんだものの、かなりの勢いでぶつかったのか右肩が痛い。しかし、これだけの人数がいるのにも関わらず、周囲の誰ともぶつかることはなかった。というのも、一瞬にしてアーシエとローブ姿の二人の周りからは人の流れが遠ざかっていたのであった。ちらり、ちらりと視線は感じるものの、ただそれだけである。

一方のローブ姿のほうはというと、フードをすっぽりと頭にかぶった状態で地面にほぼ突っ伏すような姿勢でしゃがみこんでいた。左肩のあたりには、銀色の星をかたどった大きな紋章のバッジが一つ光っている。魔法使いの証だ。そして、魔法使いの趣味なのか、銀の細い鎖がローブの上から首の周りに三連ほど、首飾りのように下がっていた。

「あのー・・・大丈夫ですか？」

一応、こちらが被害者なのだが、しゃがみこんでいるほうが重症に見えるため、右肩をさすりながら状態を確認しようとして側によったアーシエは、眉をしかめた。

(すごい酒の匂い)

反応がないことに、どうしようかと思いつつも一度声をかける。「けがとかがしてませんか？ねえ・・・」

左肩を軽く叩くと、ローブ姿がのろのろと頭を上げた。シャラ、と銀の鎖が音を立てる。

フードは被ったままなので、顔は口元から下しか見えない。

ローブ姿は少しの間黙って、口を開いた。

「誰かと思ったら・・・魔女か」

ぶつぶつと呟いた声を聞く限り、声の主は男だ。

「けがはないんですね？」

「・・・けが？何故だ？」

不思議そうに聞き返してくる様子を見ると、けがの問題はなさそうだ。

「よかった。じゃあ私はこれで」

変に絡まれないうちに、と背を向けたら。

「おーい」

お決まりのように声がかかる。

酔っ払った魔法使いというのは、酔った勢いでいきなり魔法を仕掛けてくるときもあるため、人間の酔っ払いよりも厄介な場合がある。

そのため、アーシエが聞こえなかったフリをして歩き出したら、男は大声で言ってきた。

「バッグの持ち手が切れかけてるぞ」

「え？」

バッグに視線を走らせる。男に指摘された通り、持ち手のところはちぎれかけていた。

「ありが

」

礼を言うために振り返ると、男はいつの間にか現れた別のロープ姿の誰かに肩を支えられるようにして、アーシエとは逆のほうへ歩いていくところだった。急いでいるのか、あつという間に人ごみの中に紛れてわからなくなる。必死に目で追うが、男と同じロープ姿の魔法使いが多いせいか後ろ姿では全くわからずもなく、アーシエは探すのをあきらめると、魔女協会の古ぼけたドアをノックした。

出会いと再会 2

キイ、と軽い音が鳴ると同時に、『黒猫亭』の白いドアが開く。

「いらっしやいませー」

カウンターで皿を洗いながら、やる気のない声を出した茶色の髪の少女に、少女のもとへ客の下げた皿を運んでいた老婆はたしなめるような視線を送った。それに対し、少女が一瞬だけ気まずそうな表情を見せたことに老婆は苦笑いして肩をすくめる。つい先ほどまで、客が入れ替わり立ち替わりやってきて、厨房もカウンターもフル回転だったのだ。老婆は、少女が疲れていることに気づいていた。カウンターの上に皿を置き、グレーの簡素な服の上につけている白いエプロンのしわをさつと伸ばす。

入ってきた客は同じくらいの背丈の二人組みだった。どちらも魔法使いが身につける黒いローブを頭から足の先まですっぽり覆うように着ている。一人は普通のローブだったが、もう一人は首の周りに装飾品のようなものをつけているようだった。

「奥の席を借りたいのですが　　マリアーナ殿」

老婆から見て左側の普通のローブ姿のほうに、深く被ったフードを左手で後ろへ少し引き下げながら言った。フードの下から現れた顔を見て、老婆　マリアーナが、眼鏡の奥の茶色の瞳をわずかに見開く。さつと店の中を見回し、運よく客が一人もないことを確認すると、少し沈黙した後、

「・・・わかりました。シシー」

カウンターの少女の名を呼んだ。顔を上げた孫娘に、上に行くよう指で合図する。シシーは素直に頷くと、パタパタと足音を響かせながら、カウンターを通り過ぎた先にある階段へ消えていった。その足の速さに苦笑いしてから、

「奥へどうぞ」

マリアーナは、ドアの左右にある窓のカーテンを閉じると、一番

奥にある小さな席へ二人を案内した。

暖かい紅茶を二つの白いティーカップに注ぎ、砂糖入れとともにトレーにのせて運ぶ。二人の前にティーカップをそれぞれ置くと、さつき顔を見せたほうが頭を下げた。

「忙しい時間に申し訳ありません。マリアーナ殿」

「謝らないでくださいな。ウォーリア様」

恐縮している青年に、マリアーナは安心させるために微笑みかける。

「大事なお客様の一人ですもの。・・・お水、必要かしら？」

砂糖入れを、ウォーリアともう一人の中間に置いてから小さな声で聞くと、ウォーリアは首を縦に振った。

「わかったわ。少し待っていてちょうだい」

マリアーナは、ウォーリアの隣に座っているロープ姿のほうをちらりと見るとカウンターへ向かった。水をグラスに入れ、再び二人のもとへ戻り、ロープ姿の前へ置く。

「エイド様、マリアーナ殿が水を持ってきてくれましたよ」

マリアーナとウォーリアが見ている前で、エイドはグラスに手を伸ばすとフードをかぶったまま飲もうとして、邪魔だったのか、さつきウォーリアがさうしたように後ろに引き下げた。フードの中から現れた短い銀髪と青い瞳の少年の顔に、本人にはわからないよう、マリアーナはこっそりため息をつく。

「エイド様！フードはかぶったままで飲んでください」

ウォーリアが完全に脱げてしまったフードをかぶせようとするが、エイドはその手を振り払う。

「うるさい」

至近距離に近づいただけで、匂うほどの量の酒を飲んできたらしい。青い瞳は完全に据わっていた。

「もう帰るんですよね？もう一軒とか言いませんよね？」

振り払われた拍子に脱げてしまったフードを被りながら、ウォーリアが恐る恐る尋ねた。軽いウェーブがかかった、エイドよりはも

う少し長い金髪がフードの中へ再び隠される。エイドは、フードをかぶせようとするウオーリアの手を再び払いのけると、頬つえをついて言った。

「・・・そうだなあ、そういえばまだ2軒しか行ってないしな」

「それ以上飲むというんですか?!」

ウオーリアが半ば泣きながら頭を抱えるのを見て、マリアーナは近くの椅子に座る。

「エイド様」

「うん?」

顔をこちらに向け、素直な子どものような返事を返す少年に、優しく言う。

「今日はもうお帰りなさいませ」

途端に、銀髪の青年はテーブルに視線を落とす。

「・・・お前はいつも、すぐに帰れと言う」

すねたように言うエイドに、マリアーナは続けた。

「私としては、いつまでもここにいていただいても構いませんのよ。けれど、エイド様は帰る場所がちゃんとありますもの。お帰りを待っていらっしやる方々がいることがわかって以上は、お引き留めするわけには参りませんでしょうか?」

「まだここにきてそれほどたってはいないぞ」

食い下がるような言葉に、マリアーナは寂しそうな笑みを浮かべる。

「それでも、ですわ」

エイドは、マリアーナの言葉を受けて青い瞳を閉じると、頭を抱えているウオーリアに言った。

「・・・実は、迎えば、ちゃんと呼んである」

言いたくなかったのか、わざと一言ずつ区切るような言い方だったが、ウオーリアの表情がさっきまでとは一転して輝く。

「だが、到着までもうしばらくはかかるだろうから、それまではいいだろう?」

「ええ、もちろんですわ。ですが、エイド様」
「マリアーナは立ち上がってエイドの脱いだフードに手をかけると、再び被せた。」

「フードはきちんと被ってくださいませね？」

「・・・わかった」

エイドの青い瞳を見つめ、マリアーナはにっこり笑った。

魔女協会は、その名の通り、魔女が運営している組織である。魔女は、魔法学校を卒業すると、必ず協会に所属することになっている。協会の本部は、魔法庁があるサンレスティア国にあり、支部はそれぞれの国にある。本部は一見宮殿のようなきらびやかな建物だが、支部となると規模も国によって違い、偏見が残っている国では国の外れにひっそりあったり、そうでないシエルサードのような国はメインストリートにあつたりと、様々だ。

協会の仕事は、各地を旅する魔女にその国の最新の情報を提供したり、宿泊施設の斡旋、魔女が何かしらの事件・事故に巻き込まれたときの保護、職を探している魔女への求人情報の提供など、多岐に渡る。求人に関して、一般の職業紹介所を頼ってはいけないということではないが、協会へ寄せられる求人のほうが条件が良い場合が多いため、多くの魔女たちは協会の求人情報に頼ることが多い。そのため、アーシエも協会の求人情報を利用しているのだが、ここ最近はいいい仕事に出会えていなかった。

協会の中の壁に貼り出してあつた求人は、さすがシエルサードと思わせるほどの条件のよい内容が多数を占めていた。何件かに目星をつけ、窓口に座っている長い黒髪に琥珀色の瞳の魔女に紹介を依

頼する。魔女はファイルをパラパラめくった後、首を横に振った。

「じゃあ、この屋敷の皿洗いと掃除のとかは？」

皿洗いや掃除などの仕事を嫌がる魔女は多い。（もちろん魔法使いもだが）アーシエは平気だった。

受付の魔女は、ファイルをめくることなく、再び首を横に振った。

「そこに出ている求人は、全部紹介済みなんです」

「え？一件もないの？」

「ええ。ご存じかと思えますけど、シエルサードにおける魔女や魔法使いたちの人口割合って結構高いので、求人の奪い合いになっている状態なんですよ。時期にもよりますが、うーん・・・今の時期は特に厳しいかなあ」

のん気に言う魔女に、アーシエは、

「明日になればまた求人きます？」

その問いに、魔女は首を傾げる。

「確かに求人は毎日来ますけど、あなたが希望される仕事とは限りませんし」

「何でもいいの！皿洗いでも掃除でも平気だから！」

魔女は目をぱちぱちさせながら、きよとんとした表情で頷いた。

「じゃあ、また明日来ます！あ、今からの時間でも泊れそうな宿ってありませんか？」

黒髪の魔女は、別のファイルをパラパラめくって何軒かの宿のリストをアーシエに見せた。

「黒猫亭・・・」

トップにあった宿の名前には聞き覚えがあった。

「黒猫亭はご飯がおいしいですよ。宿泊料金もリーズナブルだし」
料金のところを見ると、銀貨2枚とかなり安い。これでご飯がおいしいとなれば、もう言うことはない。

「ありがとうございます。ここに行ってみます」

アーシエは、さっき出会ったばかりの老婆の柔らかな笑みを思い出していた。

出会いと再会 3

協会の外へ出ると、夜の闇が深まっているのに加えて風が冷たくなっていた。アーシエはぶるり、と体を震わせながらショールを肩にかけ直した。寒いことに変わりはないが、まだ何もないうりマシである。協会のほうを見ると、明かりがちょうど消えるところだった。どうやら、営業時間ぎりぎりまで居座ってしまったらしい。

外の人ごみは、先ほどよりもさらに増えているように見えた。持ち手が切れかけているバッグを抱え直すと、人と人の間をぬうようにして『黒猫亭』へ向かう。

『黒猫亭』の前に着くと、黒い馬車が2台停まっていた。御者はいるものの、人ごみの中にぽつんと置かれた状態になっているそれは、違和感を感じさせた。

アーシエは、2頭の馬の前を横切ると白いドアを開けた。

「ホント、いつもすみませんねえ」

肩くらいまでの茶色の髪を後ろで一つにまとめた青年は、琥珀色の瞳を細めるとマリアーナに微笑みかけた。青年は隣に座っているエイドたちとは違い、袖や肩の部分に銀糸で細やかな刺繍がされた白いローブを着ている。その肩にはエイドと同じ銀色のバッジが光っており、彼が魔法使いであることを示していた。

「いいえ。さあ、どうぞ。ウィズ様」

「ありがとうございます」

目の前に置かれたティーカップの中の紅茶を見て、青年　　ウィズは嬉しそうに笑った。

「不良少年の迎えは嫌ですが、俺はあなたが入れてくださるお茶は

大好きなんですよ」

「誰が、不良少年だ。もう立派な大人だぞ」

隣のエイドが、訂正しろと言わんばかりに不機嫌な声を上げる。ウイズは、紅茶に口を付けた後、横目でちらりと見てから言った。

「この国の中じゃな。でも、俺から見ればまだまだ子どもだ。ああ、安心しろ。ウォーリアも俺から見れば十分子どもだから」

「え?! あ、それはそうでしょうけど・・・」

ウォーリアが、年齢差に気づいて口ごもる。

ウイズは、エイドの前に置かれたティーカップの中を覗き込んだ。

「ほら、もう帰るんだからその前にお茶を飲めよ。マリアーナさんが折角いれてくれたお茶なんだろう?」

「お前が来るのが早すぎるんだ」

エイドは、ティーカップを持ち上げると一気に飲み干した。

「そりゃあ、殿下のご命令とあらば」

ウイズの言葉に、マリアーナとウォーリアがほぼ同時に周りを見回す。

「誰もいませんよ。ご安心を」

「・・・心臓に悪いわ」

「・・・確かに悪いです」

ウイズは二人の反応に苦笑すると、立ち上がった。ぐい、とエイドの腕を引く。

「じゃあ、お世話になりました。ひよっとしたらまたご迷惑をおかけするかもしれませんが、そのときはどうぞよろしくお願いします」

「はい、いつでもどうぞ」

マリアーナが、にこにここと笑う。

エイドは、ウイズの腕を振り払おうとしたがやめたらしい。歩くのもままならないほど、酔っていることに今更気づいたようだ。

「帰りは馬車だからきついかもしれないが、罰だと思って耐えろよ?」

返事はなかったが、ウイズは気にしなかった。

「ウォーリア」

フードをかぶりながら、エイドの後ろにくっついてきている青年に呼びかける。

「はい」

「2人用の馬車が2台しかなかったから、お前がエイドと乗れ。俺はもう1台のほうに乗って帰る」

「はい」

ウォーリアはマリアーナに頭を下げると、ウィズにかわってエイドの背中を支えるようにしながら、ドアに向かった。

そのとき、ドアが開いた。

アーシエは、『黒猫亭』のドアを開けた。暖かい明かりが灯る店内にいたのは、黒いローブ姿が2人と白いローブ姿が1人。そしてさつき出会った老婆。ローブ姿の3人は、どうやらここを出ようとしているらしい。アーシエは、『黒猫亭』の中に入るとドアを少しだけ開けた状態にしてドアから離れた。

「すみません。あのー」

奥にいる老婆に呼びかけながら、ローブ姿の三人の脇を通り抜ける。

「『魔女協会』から紹介されたんですけど」

「あら、・・・あなたはさつきの」

驚いた表情を浮かべていた老婆が、その顔に笑みを浮かべた。

「魔女さん、ね？」

「はい」

アーシエは、とんがり帽子を脱いだ。

「あの、お部屋まだ空いてます？」

「ええと、確か空いていたと思うのだけど。確かめてくるから、少しお時間いただけるかしら？」

「はい」

老婆は、ティーカップを3つトレーに乗せると、カウンターのほうへ消えていった。ローブ姿の3人も店の外に出ていく。

1人になったアーシエは、きよろきよろと『黒猫亭』の中を見回した。店の前を通ったときは開けられていた窓のカーテンが、今はもう閉じられていた。店内のテーブルの数は7つ。ドアを挟んで左右に3つずつと、奥の離れたところに1つ。

「ごめんなさいね。お待たせしてしまって」
「いいえ」

老婆は、戻ってくるのを頷いた。

「お部屋、まだ大丈夫だったわ」

「・・・よかった!」

アーシエは、息をついた。老婆が目数を数回まばたきする。

「あ、もう夜も遅いし、ひよつとしたら空いてないかもしれないと思っただころだったので」

「ああ、みんな、たいてい大きな宿に行くものだから、うちのような小さい宿は最後まで空いていることのほうが多いの」

「そうなんですか？ 魔女協会の受付の人は、ご飯がおいしいって言うてましたけど」

「ミランダが？ まあ」

老婆が、何かを思い出したかのようにくすくす笑った。そして、思い出したかのように、いけないと呟いて、

「お疲れなのに、いつまでもお部屋にご案内しないのは失礼ね。部屋は2階よ。案内するわ」

「ありがとうございます。ええと」

アーシエの見ている前で、『黒猫亭』のドアが開いた。入ってきたのは、さつき出て行った白いローブ姿で、こちらに近づいてくる。「あら、何か忘れ物ですか？」

老婆が、奥のテーブルを見ながら尋ねる。

白いローブ姿は、アーシエの目の前で止まった。結構、背が高い。

顔が見えない相手を見上げるような格好は、なんとなく居心地が悪い。

「あの」

「いや」

ローブ姿は、深くかぶっていたフードを脱ぎ、琥珀色の瞳を細めて、にやりと笑って見せた。

見覚えのある青年に、

「・・・師匠？」

アーシエは一応疑問符をつけて尋ねた。

「なんで、語尾があがる？」

答えたほうも、しっかりと疑問符がついていた。

二人用の馬車の中は、広くはないが快適ではあった。

貴族の館に置いてありそうな椅子をそのまま設置したのではないかと思うほど、深紅の高級そうな生地で作られた椅子は座り心地がよかった。背もたれもしっかりしている。小窓には金色の小さなカーテンが掛けられていた。

椅子の座り心地のよさに、うとうとしかけていたアーシエは、ひと際大きく馬車が揺れた瞬間に、目を開けた。

向かい合っているウィズは、肘置きに頬ずえをついて目を閉じている。

アーシエは、目の前の小さな簡易テーブルに置かれている小さなランプに火をつけ、葡萄を一粒、指でつまみあげた後、ウィズに向かって口を開いた。

「師匠」

「寝てる」

「寝てないでしょ」

言い返してから、葡萄を食べる。いい葡萄なのだろう。甘かった。「寝てなかったら何だっというんだよ？まだ説明しろってのか？」

アーシエは、首を横にふった。

「説明なら、さっきので十分です」

「じゃあ何だよ？」

アーシエは二粒目の葡萄に手を伸ばしながら、ウィズを眺めた。

アーシエの記憶の中にあるウィズは、黒いローブを着ていた。どこにでもいる魔法使いたちと同じように。ひとつ違っていたのは、ローブにアクセサリーのような装飾品がつけられていたり、現在着ている白いローブのようにあちこち刺繍をほどこしてみたりと、目立つような外見だったことだ。

「なんで白なんですか？」

ウィズは、着ているものを見下ろすと、

「『宮廷魔術師』の制服みたいなもんだよ。最初は抵抗があったが、もう慣れた」

もう、10年も着ればな、とどこか仕方なさそうな響きを含んだ声で呟いたのを聞いて、

「じゃあ、私も白なんですね？」

何気なく聞いたアーシエに、ウィズは頷いた。

「『宮廷魔術師見習い』とはいえ、そうなるな。短期間だけだから我慢しろよ？」

「なんで、我慢なんですか？黒しか着ませんなんて言ったら、仕事なんかできませんよ」

「そりゃあ、そうだけどな・・・魔女つてのは、黒にこだわりがあるのが多いもんだからな」

「ふーん」

そうなの。と、アーシエは適当に相槌を打ち、葡萄を口の中に放り込むと、次に葡萄の隣に置かれていたオレンジに手を出した。

何しろ、空腹なのだ。

話は少し前にさかのぼる。

どうぞ飲んで、と出された紅茶を『黒猫亭』の奥の席でいただきつつ、アーシエは再会したばかりの師匠であるウィズと向かい合って座っていた。マリアーナ、と名乗った老婆は、カウンターで何か仕事をしている。

お互いの近況を話しあっているときに、ウィズの口から出た言葉にアーシエは目を丸くした。

「はあ？『宮廷魔術師』？」

ウイズは、魔法使いではあるが魔術師ではない。魔術師を名乗ることはおかしいのである。

「ああ、王宮における『魔術師』っていうのは、魔女・魔法使い・魔術師全部を含めて『魔術師』なんだよ。迫害の過去から俺たちの身分が回復したのちも、呼び方が残ってるってわけだ。でも、この国に限っては差別はない」

「でも、何か変な感じですね」

「まあな」

ウイズは、琥珀色の瞳を遠くに一度向けてからこちらに戻した。

「アーシエ、王宮で働いてみないか？『宮廷魔術師見習い』として見習いでも、給料はいいぞ。ちゃんと飯も出るし、住むところもあるしな。もし、今働いてないんだったらどうだ？」

アーシエは、ティーカップの中の残り少なくなった紅茶を軽く揺らすと、

「そうですねえ・・・旅の資金も残り少ないし、それに呪いとやらにも興味あるし」

呪いとやら、あたりはほぼ無意識に口から出た言葉だったが、ウイズは聞き逃さなかった。

「呪いについて知ってるのか？」

ウイズを上目づかいで見るとなるのは、座っても身長差があるためだ。

「王子様限定の、でしょ？」

「あれはまあ、有名といえは有名だからなあ。で、どうする

？来るか？」

呪いの話はさらりと流されたが、アーシエは迷わずに頷いた。

再び現在に戻るわけだが

アーシエの空腹を察したマリアーナが持たせてくれたフルーツを一人で平らげた後、アーシエは疲れていることに気づいて、背もた

れに寄りかかっていた。お腹が多少でも満たされた後にこうやってじっとしていると、睡魔を覚えるのは人間だけではない。魔女も同じだ。

ウィズが、小窓を開ける。吹き込んできた冷たい風にアーシエが顔をしかめていると、ウィズが小窓を閉めながら言った。

「あと少しで着くぞ」

場所の確認だったらしい。アーシエは、背もたれから体を起こした。

「そうですか。寝ないほうがいいですね」

シヨールをぐるぐる体に巻きつけながら言うと、ウィズはなぜかおかしそうに言った。

「馬車で眠れるのか、お前は。あいつが聞いたら」

「・・・あいつ？」

「俺たちのご主人さまだよ。少し厄介なところがあるけどな、基本的に悪いやつじゃない」

ご主人様、というわりには敬意を感じられないその言葉に、ひたすら眠気と戦っていたアーシエは首を傾げた。

「会えばわかると思うが、一番早くても明日の朝だな。あ、顔は悪くないぞ」

顔は悪くない その言い方に、アーシエはますますわからなくなかった。

魔女、王宮へ 2

高い城壁に囲まれた、シエルサード王国のロイデンフェリア宮殿は、首都のメインセリアの外れに位置している。白で統一された宮殿は、所々に円形のモチーフが取り入れられ、数ある国の宮殿や城の中でも5本の指に入るほど美しいと言われている。また、美しいと評されるのは宮殿だけではない。庭園も、シンプルながらよく手入れされていて、訪れる者の足を止めてしまう。

白い円柱が立ち並ぶ回廊の奥の住人、カレン王妃もそのうちの人だったが、今夜の彼女は花ではなく、遠くにある城門の方をずっと見つめていた。

「王妃様、そろそろお部屋の中へお戻りくださいませ。この寒さでは風邪をひかれてしまいます」

寒さのためか、震えながら言うてくる侍女にカレン王妃は頷いてもう一度城門の方を見つめた。宮廷魔術師のひとりが城の外を出て行ってから、十分に寒さを感じるほどの時間はたっている。

城門の方角に背を向けたところで、微かに馬が地面をける音が聞こえた。

「そうね。そろそろ入りましようか」

カレンは、にっこり微笑むとドレスの裾をひるがえし、侍女を促した。侍女は、ちらりと背後を見てからこっさり呟いた。

「大急ぎで準備しないと、だわ」

彼女が仕えているもう一人の主がようやく帰ってきたのだ。宮殿中が 特にコックが 今か今かと待ちわびていた主が。

カレンは、白百合の間
うに作らせた部屋である

カレンが、家族だけで食事ができるよ
の椅子に座っていた。少女時代から変

わらない、ゆるく波打つ艶やかな金色の長い髪は、昼間こそ頭の上の方にきつくまとめられているものの、夜になれば彼女自身にほどかれて肩よりも少し長いぐらいの長さになる。同時に、ダイヤが散りばめられた王冠や真珠が連なった首飾り、幾重にもレースがあしらわれたドレスも脱ぎ捨てられ、クローゼットの中に朝まで収められるのだ。華やかなドレスが嫌いなわけではないが、今身につけているシンプルで軽い青色のドレスの方がほっとできるのは当然といえれば当然のことだった。

この部屋の中は、王宮の中にある他の部屋とくらべると非常にシンプルだった。壁に貼られているのは金箔がちりばめられた壁紙ではなく、アイボリーとオリーブのストライプ模様の壁紙で、天井からつるされているのは重たいシャンデリアではなくランプ型の照明。4人分の食事を置けばいっぱいになってしまっほどの大きさのテーブルは、王族が揃って食事をする長いテーブルとは違い、非常に質素なものだ。もちろん、カレンが座っている椅子もクッションがなければただの固い椅子である。しかし、このテーブルと椅子を白百合の間に置くことに決めたのはカレン自身だった。カレンは、職人が一つ一つ丁寧に削ったテーブルの角の丸みと椅子の肘かけ部分を好んでいた。

テーブルの角に細い指を滑らせたところで、ドアをノックする音が部屋の中に響いた。

「どござ」

ドアノブが回り、ドアが開く。

「遅くなりました」

一礼し、部屋の中に入ってきた息子に、カレンは短く言った。

「座りなさい」

向かい側の席に座ったローブ姿の息子を、カレンはドレスと同じ色の瞳で見つめる。父親譲りの銀髪の髪とサファイアの瞳。成長するにつれ、顔立ちも父親にどんどん似てきていた。同時に過去のことも思いだしそうになり、カレンはため息をついて目を閉じた。

「大丈夫ですか、母上」

こちらを気遣うような言葉に、カレンは目を開けて首を横に振る。「大丈夫ではありません。あなたの口から、人を気遣う言葉ができることが不思議です。その格好は何です？毎晩、こんな時間まで一体何をしているのです？」

「社会勉強です」

「酒を飲み、遊んではかりいるのが社会勉強だというのですか？民の信頼なくして国を統治できると甘いことを考えているのではないでしょうね？あなたは王になる人間なのですよ？クラウス」

「ええ、わかつています。母上」

目をそらすことなく、表情も変えることなく頷くクラウスのことが、カレンは理解できなかった。今のようなことをいうのは日常茶飯事であり、そのたびに真っ直ぐに見つめてきて頷くのに、同じことを繰り返す

「・・・食事はまだなのでしょう？」

「ええ」

カレンは、手元のベルを鳴らした。

ドアが開き、侍女たちが入ってくる。カレンはすでに他の王族や貴族たちとともに、夕食を取っていたが、クラウスに合わせて軽く食べられるものとサンドイッチとコンソメスープを用意させていた。目の前に静かに置かれた二つの皿を見下ろし、クラウスにも一皿目が用意されたのを確認すると、食事を始めるように促した。

「そういえば」

カレンは、口元をナプキンで拭いてから切りだした。

「まだ誕生式典用の服の採寸をしていないそうですね？」

クラウスもすでに食事を終え、食後の紅茶に口をつけようとしていた。

「 ああ、そうでした」

クラウスのサファイアの瞳がわずかに見開かれる。きよとん、としたような表情が一瞬だけ浮かんですぐに消える。

「明日必ず採寸をします」

カレンは、微笑むと頷いた。

「ええ。それから、明日はどこにも外出しないようになさい」

「なぜですか？」

「いい加減、やらねばならないことが山積みでしょう？そろそろ私の仕事にも支障が出るころです。それに、明日、あなたに仕える者が宮殿に來ます。顔合わせは早いほうがいいでしょう」

「召使いですか？」

少しも興味がなさそうな声で聞いてきた息子に、

「宮廷魔術師よ」

カレンは何気ない様子で返してから、手元のティーカップを引き寄せた。

「……宮廷魔術師、ですか」

微妙に顔をしかめた息子に、カレンは「逃げることは許しませんよ」と付け足した。

「あ、おはようございます。師匠」

「・・・おはよう」

ふわあ、とあくびを噛み殺しながら挨拶を返してきたウイズに、アーシエはコーヒーをいれてやった。

「砂糖なしでよかったんですね」

「おお、サンキュ。よく覚えてたなあ」

そう言いながら目の前の席に座ったウイズに、コーヒーの入ったカップを渡す。

「あんまり人にコーヒーをいれたりしませんので。 　　ここのご飯、おいしいですね」

朝早くだというのに、食堂の長い白テーブルはほぼ満席だった。

ほとんどが騎士や侍女で、宮廷魔術師の服を着ているのはアーシエとウイズの二人だけだ。

「そりゃあ、いい材料使ってるし、コックの腕もいい。食事はどこでとつてもいいんだが、たいていはここで食べる」

「師匠は朝は苦手でしたよね」

ウイズは苦笑いしながら頷いた。

「こればかりはな。 　　そうだ。アーシエ、ちょっと立ってみるよ」

「何ですか?」

「いいから。ほら」

アーシエは首を傾げながら立ちあがった。

「ちょっと回れ」

「はあ?」

「回れって」

アーシエは渋々くるりと回ってみせた。スカートの下のふわふわしたレースが足にまとわりつく。

「悪くないな　お前さ、黒よりも白のほうが似合うんじゃないか？」

ウイズの言葉に、アーシエは自分自身を見下ろした。膝丈までの裾の長さを除けば、所々レースが縫い付けられたこの服は白いドレスのようだった。

レース状の襟元に結び付けられているのは、白いレースで縁取られた青いリボン。リボンは控えめに膨らんだ肩の部分にもつけられていた。胸の部分から腹部にかけては、縦方向に大小の白いレースがあしらわれ、開いた袖口からも白いレースがのぞいている。膝まではすんとしたワンピースのような形で、貴族の令嬢のように腰をしめつけるコルセットというものはないが、多少なりとも腰回りがふんわりとして見えるのはスカート部分の中にもレースが縫い付けてあるからだだった。この服とともにクローゼットに置いてあったのは三つ　フード付きの白い上着と白いストッキング、エナメル素材で作られた白い靴で、さつき全て身に付けて部屋の鏡の前に立ってみたところ、さすがのアーシエも少しばかり違和感というものを覚えた。黒という色にこだわりはないが、ほぼ白一色の自分自身の姿が不思議なものに思えたのだ。

「・・・そうですか？」

同じくほぼ白一色のウイズは、あっさりと頷いた。

「うん。悪くない。あ、座っていいぞ」

「はい。でも　どうしてローブじゃないんでしょう？性別によつて服が違うものなんですか？」

椅子に座つてスカートの裾を持ち上げながら聞くと、ウイズは頬づえをつきながら、

「うーん、どうなんだろうな。宮廷魔術師は俺一人だったし。どういった服装のほうがいいかっているいろと注文はしたけど、実際に用意したのは俺じゃないしな」

「ひよつとして、『ご主人様』が用意してくださったんですか？」

ウイズは笑つて迷いなく首を振った。

「あいつじゃないことは確かだ。おそらくはカレン王妃だろうな」
カレン王妃の名前を聞いた途端、アーシエの脳裏についてこの間見たパンフレットに載せられていた王妃の肖像画が浮かび上がった。
「パンフレットで見たんですけど、とても綺麗な方ですよ。カレン王妃って」

「だろ？国一番の美人だと思うよ。国民にも愛されてるし、他の国からの信頼も厚い。なのに」

唐突に、鐘の音が遠くから聞こえた。

「なのに？」

ガタン、と大きな音を立てながらウイズが立ち上がる。

強張った表情を浮かべながら、まだコーヒーの入っているカップを食堂のカウンターに置いた師匠に、弟子はとりあえず思い浮かんだ可能性について聞いてみた。

食堂のテーブルに座っているのは、アーシエとウイズの二人だけ。ということとは

「……私、初出勤の日に遅刻ですか？」

「……まだ一回目の鐘だから間に合うかもしれん。走れ」

魔法学校時代、ウイズが授業に遅れてくることはよくあった。時間を守るのが苦手だったのだろうとアーシエは在学時から現在に至るまで勝手に推測していたのだが、どうやら当たっていたらしい。

「走れっ！」

「痛っ！師匠、痛いです！腕っ」

乱暴に掴まれた腕は、白い円柱が立ち並ぶ回廊を抜けて謁見の間にとどり着くまで離されることはなく、アーシエがどんなに抗議しても無駄だった。

謁見の間の白い扉の前で、二回目の鐘の音が鳴った。

「……開けて、くれ」

あがっている息と服装を整えながら、ウイズが扉の前に立っている二人の騎士に言う。その間に、アーシエは上着を着てフードを被った。

「そちらの方はどなたですか？」

「今日付けで、殿下にお仕えする者だ」

「ああ、なるほど」

騎士の一人が扉を開けた。早足で入っていくウイズの後に、アーシエも小走り気味についていく。

足を踏み入れた部屋の中は　　とにかく広くて明るかった。天井も高く、シャンデリアがいくつも吊り下げられている。部屋の左右には多くの貴族や騎士や侍女が並んで立っていて、中央は通路のように空いていた。そしてその奥の壇上には、カレン王妃と

銀髪に青い瞳の少年　　おそらく王子なのだろうが　　が椅子に座っていた。

ウイズは王妃に向かって歩いていく。アーシエは、周囲からの視線を感じつつ、後ろをついていった。ウイズは、王妃のいる壇上より少し離れたところで立ち止まってアーシエのほうを振り返った。横に出るように右手で促され、ウイズの右隣りに立つ。

ウイズの深い一礼にアーシエもあわてて一礼すると、ウイズが口を開いた。

「陛下、殿下、この者が今日からシエルサードとブランジェット王家に仕える者です。名前はアーシエ。私の弟子です」

「よ、よろしくお願いします」

もう一度礼をしてから顔を上げると、微笑んでいる王妃と目が合った。頭の上でひとつにまとめられた金色の髪、優しさにあふれた緑色の瞳。深紅のドレスを優雅に着こなしたその女性ひとは、ウイズの言った通り、肖像画よりもずっと美人で特別な雰囲気を持っている。「アーシエ、というのですね。美しい名前です。どうぞよろしく頼みますよ」

「は、はい」

「私はカレン。そして、こちらは王子のクラウスです」

紺色の詰襟の服に灰色の長い上着を着た、銀色の髪に青い瞳の美しい少年は、興味がない様子でこちらを見た。

王妃とは対照的なその表情を前に、アーシエは一礼した。

再び顔を上げたときには、クラウスの視線はもうこちらには向けられていなかった。

呪われた王子 1

あれから、謁見の間で、王妃と王子へ挨拶が終わってほっとしていたところへ、今度は貴族や騎士たちから一人ずつ挨拶をされ、あまりの数の多さと自己紹介のスピードについていけず疲れてしまい、その後白で統一されている宮殿内の各部屋の場所を把握しようと思ちこち回ってみただが、これもまた数の多さに

「とりあえず、この階段を上がって右の奥がクラウス王子の部屋についていことさえ覚えておけばいいかな」

とりあえずは、一番重要な部屋の場所さえわかっておけば大丈夫だろうと、腕組みをして階段の先を見上げていると、上がった先をちょうど左から右に横切ろうとしていた、若草色の隊服を着た青年が、こちらに気づいて立ち止まった。

「どうしました？何かお困りですか？」

青年は、そう言いながら階段を下りてこようとした。アーシエはあわてて首を振って、

「いえ、大丈夫です。今から殿下の部屋にお伺いしようと思っただけです。場所もちやんとわかっていきますから」

青年の足を止めるために階段を駆け足で上がる。それほど長い階段ではないが、まだ歩幅のつかめていない場所のせいか、アーシエの視線は自然に階段を追っていた。青年の履いている革靴が目に入ったところで顔を上げると、柔らかい笑みとともに左手が差し出されていた。大丈夫です、と再度言いかけて、ここはきつと右手を乗せたほうがいいのだろうと思いなおし、右手をそつと左手に乗せる。たったそれだけなのに、歩き始めたらなぜか自分の足で歩いているのではなく、優しく運ばれているような気がした。

「ありがとうございます」

階段を上がりきったところで、アーシエが右手を離してからぺこりと頭を下げると、「そんな！」と、あわてて青年も頭を下げてき

た。軽くウェーブのかかった短めの金髪がふわりと揺れる。

「私は、ウォーリア・エレンハイムと申します！どうぞよろしくお願いたします。アーシエ殿」

『殿』をつけられて呼ばれたことがないアーシエは、少し困惑した後、

「こちらこそ。．．．殿は大きさです。普通にアーシエをお願いします」

それに対し、ウォーリアも緑色の瞳に『困ります』という感情を浮かべた。

「では、アーシエ様で」

アーシエは、ウォーリアと同じ色の瞳を宙にさ迷わせながら「うん」と唸った。

「そうですね。初対面の人に呼び捨てしてくださいっていうのも．．．じゃあ　せめて、アーシエさんとかだったら」

ぱっ、とウォーリアの表情が輝いた。まるで子どものような目の輝き方に、アーシエは目をぱちくりさせた。

「わかりました。アーシエさんと呼ばさせていただきます！」

「なら．．．私も、ウォーリアさんと呼ばさせていただきますね」

「はい！いろいろ大変ですが、一緒に頑張りましょうね！」

「はい」

なぜか心底嬉しそうなウォーリアにつられるようにしてアーシエも笑っていた。

急に、目の前の白いドアが内側に向かって開いた。

そこに立っていたのは、白いローブを着たウイズ。謁見の間に行ったときとは違い、フードは外して、肩までの茶色の髪が見えている。

「遅いと思っていれば．．．何を楽しくおしゃべりしてるのかなあ？」

腕組みをしたウイズは、明らかに不機嫌そうだった。

「まあ、説教は後回しにするとして　早く入れ。時間がない」

青い絨毯の敷いてある部屋に入るなり、紙にペンを走らせる音がアーシエの耳元に届いた。

ペンを走らせているのはクラウスで、大きな机の上に高く積み重ねた紙に一枚ずつ何かを書きこんでいる。ひたすらに黙々と書き続けているその姿は、一枚の絵のようだ。

「まだまだあるからな」

クラウスの机にくつつけるように置かれている長机　この上にも大量の紙が積み重ねていた　の下に置いてある椅子を引っ張り出して座ったウイズは、ため息をつきながら言った。アーシエは、ウイズの手招きに従って大量の紙の一部を持ち上げると、クラウスの机の上に追加していく。紙には、飾り枠が印刷されていて、その中に書かれていたのは舞踏会についての日時と内容だった。一番下は右側に印が押されているが、真ん中は空白になっている。

机の上の紙は全部同じものだったが、クラウスの手元に一旦置かれたものには、印の左側にサインが書きこまれていた。先ほどから書きこんでいたのはサインだったのだ。だが、サイン済みの左側の山はまだそれほど高くなっていない。

「言われなくてもわかってる」

手首を動かす速さはそのまま、クラウスが返事をする。

「もつと急がないと夕暮れまでに片付かないぞ」

ウイズがうんざりした顔で続けると、クラウスは微かに笑いながら言った。

「俺があと3人はいないと不可能だな。あと1週間はかかる。そうだが、魔法でどうかしたらどうだ？こんな紙の山、あつという間に終わる」

アーシエは二人の会話を聞きながら、クラウスの目の前にある書類の山の上に紙を数十枚置いた。

「そうだろう？アーシエ」

「はい？」

謁見の間での反応からして、まさか名前を呼ばれる日がくると思っ
ていなかったアーシエは、ペンを走らせる手を止めて顔を上げた
クラウスを真正面から見た。背後の窓から降り注ぐ日差しにきらき
らと輝く銀色の髪はもちろん綺麗だと思っただが、何よりも印象的な
のは、サファイア色の瞳だった。鮮やかに、しかし深みもあるその
色は、彼もまた特別な人間であることを物語っているように思えた。
「ええと・・・」

どう答えるべきか、いやどう答えなければならないのかとアーシ
エが考えこんでいると、ウイズが口をはさんできた。

「おい。見習いとはいえ、アーシエも『宮廷魔術師』だからな。俺
と同じ権限はあるんだぞ」

それを受け、再び顔を伏せてペンを走らせ始めたクラウスが言う。
「そのことについてまだよくわかっておられないようだぞ？」

ウイズが本日二回目のため息をついた。

「まだ教えてないんだよ。誰かさんが、さっさと仕事を片付けてく
れてたら時間を取れたんだがな」

「ふーん。俺のせいか。それは済まないことをしたな。なら、特別
に許可しよう。俺を待っている間に特別講義をしたらいい」

謝罪の言葉を棒読みで言い終えた後、何やら笑顔になったクラウ
スはウイズにそう提案した。ウイズは腕組みして、しばし考える仕
草をしてから、そばに立っているウォーリアの腕を掴んで引き寄せ
ると耳打ちした。

ウォーリアが目を瞬きさせながら頷き、にこにこ笑顔でアーシ
エの側にやってくる。ウイズのほうを手で指示した。ウイズは宙に
指で呪文を書き散らしながら、ちらりと一回だけこちらを見ると言
った。

「アーシエ、こっちに来い。久々に講義だ。夕暮れまでに全部叩き
こむからな。覚えるよ？」

「一体どのくらいあるんですか？」

宙に書き留められていく呪文　その多くが時限付きや他の魔法発動関連時に連動するという制限が付け加えられていた　に近づいて読みとろうとするが、よく読めない。ウイズの字は昔からそうだ。

「飛ばせるものは飛ばすから、そうだなー・・・本で言うと大体100冊分くらいか。でも、俺の授業スタイルは」

「楽に、楽しく、早く」

「そうそう」

ウイズが、一番最初に書いた呪文の端を指でトン、と叩く。それに反応して、制限付きの呪文以外の呪文が金色に輝いて空気に溶け込むようにして消え

現れたのは古くて大きな本だった。しかし、その本には触ることができないようになっていた。どんなに精巧にできていても、ウイズの魔法によって映しだされた幻影だからだ。

本は、アーシェの目線より少し上のところでゆっくりと回転した。革の表紙は、角が擦り切れている。表紙と背表紙に刻まれている金色の文字も所々剥げ落ちていて、しかも文字自体が小さいので、何の本なのかさっぱりわからない。

「これは、宮殿の地下の書庫にある、シエルサード王国史だ。じゃ、始めるぞ」

ウイズの声を合図に、音を立てることなく表紙が開いた。

呪われた王子 2

ページがめくれると同時に、アーシエの目の前に二体の像が現れた。半ば透き通っているそれもまた、ウィズの魔法によって作り出されたものである。

一体は、鎧を身にまとった男で、もう一体はローブを風にはためかせた女の像だった。男の視線は上に向かって伸びていて、女の視線はそれとは逆に下へ向けられていた。

「男のほうは、リアン。シエルサード王国の初代の王だ。女は、クーランジェ。リアンが領土を広げる際に捕らえた他国の魔女らしい」
アーシエは、ウィズの隣に置いてあった椅子を引っ張り出して座った。

「リアン王の時代は、各国が領土を奪い合っていた。いくつもの国が生まれ、消えていった時代だったらしい。そんな中、リアン王が最も苦戦したのがクーランジェがいた国だった」

リアンとクーランジェの像が消え、代わりに浮かび上がったのはリアンが戦場を馬で駆ける絵と、妖しげに微笑むクーランジェの絵だった。クーランジェの足元には、苦しげな表情を浮かべて天に手を伸ばす人々が描かれていた。

「クーランジェは、強い力を持っていた。リアン王によって滅ぼされた国の政治に関わるほどの影響力を持っていたという」

クーランジェの絵が別のものと入れ替わった。リアンにひざまずき、許しを請う姿に。

「クーランジェは、最後までリアン王に抵抗したが結局は捕らえられて処刑された。その瞬間から、長く続くひとつの問題が発生したんだ」

すべての絵が消えた。絵だけではなく、本も消えて

「クーランジェは、処刑の間際に呪いの言葉を残した。ブランジェット王家の王子は18歳になることなく、死ぬだろう、と」

アーシエは、スツ、と冷たいものが横を通り抜けていったような感覚を覚えた。呪いの種類は数多くある。人間の少女たちが知りたがるおまじない程度のものから、命を奪うものまで。しかし、呪いも所詮は魔法なのだ。高度になればなるほど、多くの材料や道具、複雑な手順が必要になる。クーランジェという魔女は、それを要しないほどの力を持っていたということなのだろうか。

ウイズは遠くを見ながら続けた。

「誰もこの魔女の呪いを信じていなかった。もしも、俺がその場にいたとしても信じなかっただろう。しかし、3人の王子のうち2人の王子が18歳の誕生日を迎える前に次々と亡くなり、リアン王は信じざるをえなくなった。状況を変えたというか、方向を変えたのが王妃だ。2人の王子が次々と亡くなったことで、王妃も何か思うことがあったんだろうな」

「王妃は」

「そう、魔女だった。初代王の妃は、クーランジェほどの力はなかったとされているが、確かに魔女だったんだよ」

ウイズの声に混じって、誰かが囁いているような声が聞こえてきた。早口で囁いているそれが何なのか、アーシエにはすぐにわかった。

(でも、どっちが?)

クラウスとウォーリアを交互に見る。

わずかにクラウスの口元が動いた。

「クラウス・・・」

ウイズが、不機嫌そうに呟く。クラウスは、唇の両端を持ち上げてみせた。部屋の中に一気に魔力が満ちる。

「いきなりは」

「というわけで、後は頼んだぞ。ウォーリア」

ウイズの言葉をさえぎり、クラウスがにつこりと極上の笑みを浮かべながら机の前に立つウォーリアの右手に触れた。

「え？うわわわっ?!」

光の帯が、ウォーリアの右手にからみついて消える。そのとき浮かび上がった魔法陣の内容に、アーシエは目を見張った。決して高度なものではなく、だからといって初心者が見えるものでもなかったが

ひどく馬鹿馬鹿しかったのだ。

「何ですか?!今の」

「・・・あー」

急な目まいに襲われたときにそうするように、額を押さえるウイズの横で、アーシエはじーっとウォーリアを見つめた。

「何か、いやな予感がするんですが・・・お二人の様子を見ていると・・・」

ウォーリアの声が弱々しくなっていく。

「じゃあな。夕方までにはたぶん戻る」

「おい、クラウドス!」

ウイズは怒鳴ったが、どこから取りだした黒いローブを抱えて窓からするりと外へ出て行ったクラウドスを引きとめることはできなかった。

「あのバカがつ!!なんでこんなことばかりするんだ!」

クラウドスはあっという間に遠くへ走り去っていく。

「ええと、ウォーリアさん。とりあえずその椅子に座ってください
い」

アーシエはさっきまでクラウドスが座っていた椅子を指差した。

「え、でも」

「今はその椅子に座るのが一番いいんです」

クラウドスがウォーリアにかけた魔法は、時限付き。通常は発動までの時間を長めに設定するのだが、今回の場合は、あまり時間の猶予がない。

「わ、わかりました」

ウォーリアがおそろおそろといった様子でクラウドスの椅子に座った。

5。

4。

3。

2

1。

(たぶん、もう発動するかな・・・)

アーシエは、心の中でカウントしながらため息をついた。

「あれ？」

ウォーリアの右手が不自然に動いた。右手はペンを握り、そして

「な、なんで?!」

彼の右手はさっきまでクラウドがサインしていた舞踏会への招待状へと動き。

「ど、どうしよう!」

勝手にサインしたのだ。

「大事な招待状なのに!」

アーシエはまだ何もわかっていないウォーリアの前に行くと、サインを指差した。

「心配しなくても大丈夫です。そこにサインしたのはあなたの名前じゃなくて、クラウド殿下の名前ですから」

「・・・筆跡もそのままなやつだ。その点も心配いらないぞ。」

疲れ切った声でウイズが付け足す。

「え?あ、本当だ」

ウォーリアがホツとしたように呟いた後、もうひとつの問題点を口にした。

「でも、止まりませんね。これ」

ウォーリアは、クラウドのサインが入った招待状を次々に書き上げていた。

「まあ、そういう魔法ですから・・・」

「うん。そうだな」

ウォーリアには見えないだろうが、動き続ける右手には魔法陣がはつきりと浮かび上がっていた。10の魔法陣が重なっているため、

見た目には複雑に見える。

「アーシエ」

「はい」

「今日はお前があいつを連れ戻せ」

「今日は？それってどういう」

「戻ってくるまで、面倒くさい解除は俺が引き受けるから。……」

何か疲れた。見つけたら引きずって連れてきてもいいぞ。宮廷魔術師は教育係でもあるからな」

「……教育係ってそこまでやるんですか？」

「普通はしないし、そこまでする必要もない。でも、クラウスは一筋縄じゃいかない。じゃ、任せた。城下にいるとしたらたぶん酒場あたりだ。それか、『黒猫亭』」

ウイズは疲れた、ともう一度呟くと椅子に座りこんだ。

部屋の中にはウォーリアがペンを走らせる音が響いている。魔法による強制的なものだとはいえ、招待状にサインしていることに変わりはない。ウォーリアの顔はひどく緊張していた。

「じゃあ、行ってきます」

ウイズが頷くのを横目に、アーシエは部屋の外へ出た。

呪われた王子 3

どこを探すべきなのか。

ウィズから探すように言われ、部屋を出たはいいものの、まだ宮殿内部の部屋の位置関係も何もほとんどといっていいほど把握していないのである。

(部屋をひとつひとつ調べていくというのも何かなあ・・・それとも、もう本当に宮殿の外に出てしまったのかな)

だとしたら、もつと大変だ。

(でも・・・)

もしもすでに宮殿の外にいるのだとしたら、ひとつだけ、手掛かりと呼べるようなものはあった。

「黒猫亭、か」

アーシエは、さつき上がってきた階段を駆け降り　かけて、足を止めた。ちょうど王妃が3人の侍女を従えて階段を上がったところよとしていたからだ。

「まあ、アーシエ」

王子と同じ色の瞳を細め、微笑んだ王妃にアーシエは頭を下げた。「あなたの部屋へも使いを出したのだけれど、ここで会えてちょうどよかったわ。今からクラウスの部屋でお茶会を開こうと思っているの。あなたもいかがかしら？」

アーシエは数秒迷った末に、口を開いた。

「クラウス王子はいらっしゃいません。急な御用事ができたとかで外出されました」

「急な、用事？」

王妃が首を傾げ、次に胸に手を当てて目を閉じた。

「王妃様っ」

「・・・王妃様？」

三人の侍女が上げた悲鳴に近い声と、疑問形のついたアーシエの

声に答えるように、ため息をひとつついてから王妃が目を開ける。その瞳には先ほどまでであった喜びはなく、悲しみが浮かんでいた。「また、抜け出したのですね。そうなのでしょう？」

あのバカがっ！！なんでこんなことばかりするんだ！

さつきウイズが叫んだことと王妃が今言ったことが重なって聞こえた。

「私は・・・今からクラウス殿下を探しに行きます」

「あの子は、王にならねばならないのです。どうか、頼みます」

深々と礼をした王妃に、アーシエももう一度礼を返して階段を駆け降りた。

宮殿の外に走り出たアーシエが向かったのは、城門だった。城門へ続く道は、緩やかなカーブを描く石畳である。道は左右にも枝分かれしていて、両側にある庭園に続いていた。庭園では、貴族たちがお茶会を開いているようだ。あちこちに置かれている小さなテーブルにはお茶のセットが置かれている。ここでもほとんどの貴族の令嬢たちは扇子を片手に持っていた。クラウスの姿がどこにもないかと左右を見回すと、お茶会をしている貴族たちを見ることにもなる。アーシエは合わせるつもりはなかったのだが、お茶会を楽しんでいた一人の令嬢と目が合ってしまった。その令嬢は、片手に持っていた扇子でさっと口元を隠し、隣の貴族に何かを囁いた。その貴族は、さらに隣に座っていた令嬢に何かを囁く。

(・・・脚?)

彼らの視線は、アーシエの脚に集中しているようだった。

ふと、ひらめく。

(短すぎるんだ)

アーシエに用意されていたこの服は、彼らにとって奇妙なものに移るのかもしれない。少なくとも、スカート部分の丈の長さに関しては。考えてみれば、令嬢たちの着るドレスの丈はどれも長く、アーシエのように脚が見えているものはひとつもない。

(少なくとも、私にとってはこの服のほうがいいんだけど)

まだ、ふわふわのレースの感触には慣れないけれど。

(あんな長い丈のドレスで走ったら走りにくいだろうし、邪魔になるだろうし)

ドレスを着たことのないアーシエにとって、それは想像でしかないのだが。

そんなことを考えながらも、生垣や彫像のほうへ目を走らせる。

(やっぱり、もう外へ)

あきらめかけたそのとき、城門まであと数歩というところの、すぐ近くにある生垣が不自然に揺らめいたのをアーシエは見逃さなかった。揺らめいたその一瞬に、クラウドの気配を感じ取ったのだ。アーシエはその場所まで近づいた。

「殿下」

声をかけたが、何事もなかったかのように静まりかえっている。

「私は殿下の教育係だそうですね」

何も無いところへ向かって話をするのは、傍から見ればおかしい光景ではあるが、アーシエは続けた。ここには貴族もいない。

「教育係として申しあげます。今すぐ出てきてください。王になる方が、つまらないことに魔法をお使いになるのはどうかと思います。それに、ウォーリアさんの体力がもっても、気力がいつまでもつかわかりませんし」

クラウドは、沈黙を保っていた。アーシエは腕組みをして息をついてから空中の一点を見据え、口を開く。

「おそらく、殿下の戻られる予定の時間までウォーリアさんはもちません。ですから」

アーシエはそこで言葉を切って、クラウドの使っている魔法とは逆の効果を持つ魔法の呪文を素早く唱えた。

「殿下には今すぐお部屋へ戻っていただきます」

ぐにやり、と空気が歪んだ。嫌そうな顔をしたクラウドがアーシエのすぐ目の前に現れた。持っていたはずの黒いローブは着てい

なかった。

「ウィズよりも早いかな・・・呪文詠唱」

ずると音が出そうな勢いで、クラウドが生垣に背中を押しつけ、芝生の上に崩れるように座る。クラウドの周りには、無残にも生垣から千切れてしまった葉っぱが何枚か散らばっていた。

「えっ、殿下？」

尋常でない様子のクラウドの隣にあわてて駆け寄って確認すると、顔が少し青ざめている。

「慣れないものを使いすぎた。集中は体力を使う」

独り言のように呟いて、クラウドがこちらを見上げる。顔にも、特に目に疲れがにじみ出していた。青い瞳はどこかぼんやりとしている。

「誰か人を呼んで」

「いや、いい。面倒だ」

そう言ってクラウドはアーシェから視線を外した。空を見上げて目を閉じる。

暖かい風が、クラウドとアーシェの髪を撫でていった。

(ええと・・・)

少しだけ話してまた黙ってしまったクラウドに、アーシェは困惑していた。瞼が時々揺れているということは眠ってはいないのだから、クラウドが目を開けて立ち上がる様子はない。

「・・・座っていい。まだしばらくはここにいる」

目を閉じた状態でクラウドが言った。

「はい。・・・失礼します」

アーシェはクラウドの隣に　　とはいっても3歩ほど離れた位置だが　　に座った。二人の目の前には生垣があり、その向こうからは貴族たちが談笑する声が微かに聞こえてくる。何を話してい

るのかはよくわからないし、特に興味もない。

アーシエは、きよろきよろと周囲を見回した。見回しても生垣がずっと続いているだけでそれ以外には何も無いのだが

「リアン王の」

さっき聞いたばかりの名前が、隣から聞こえた。

アーシエは慌ててクラウスを見たが、クラウスは目を閉じたままだ。唯一動いたのは唇。

「リアン王の妻は、魔女だった。・・・クーランジエほどの力はないが、魔女だったらしい」

「・・・はい」

なぜ、急にクラウスの口からリアン王の名が出たのか、アーシエにはわからなかった。

「王妃は　　魔女だった」

「はい」

クラウスは薄く目を開けた。

「王妃は呪いの形を変えた。死ではなく眠りへと」

「眠り・・・？」

「　　さっきの続きだ。途中までだっただろう」

そこまで言うと、クラウスはのろのろとした動作で立ち上がった。

「面倒になってきたから戻る」

さっさと歩きだしたクラウスの顔色はまだ悪かった。

「あの、もう少し休んだほうが」

「いい。自業自得というやつだ。それぐらいはわかっている」

なら、なぜ。という疑問がアーシエの中に浮かんだが、口にはできなかつた。

聞いてはいけないようなそんな気がしたからだ。

小話 「魔女と師匠の話」(前書き)

WEB拍手に一部連載していた話ですが、こちらに全部掲載します。
リクエストありがとうございました。

本編の方に移動しました(11・24)

小話 「魔女と師匠の話」

コンコンコン。

アーシエは、ドアをきつちり三回ノックした。しばらく待ってみるが、返事はない。念のため、もう一度ノックしてみるが同じく返事はなかった。ドアノブを回す。鍵がかけられていなかったため、ドアは簡単に開いた。内心、こんなことでもいいのかと思いつつ中に入る。

部屋の主は、彼女の師である。

今日という日はすでに動いているにも関わらず、ウィズはまだベツドの上で眠っていた。アーシエにとって、そういった姿は見飽きているというか日常の一部であるため、もう特に思うことはない。この魔法学校に入学して、ウィズが担当教師になったときからのことなのだ。とはいっても、教師であるウィズが寝坊などと本来は考えられないことである。

「うわー、本当に寝てる」

背後から笑いを含んだ声でアーシエの肩ごしにひよいとベッドをのぞきこんだのは、寮で同室のチエルシーだった。黒い髪は、耳の下までしかない。ほとんどの女子生徒が髪を伸ばしている中、チエルシーは決して髪を伸ばそうとしなかった。

「嘘じゃないって」

「ああ、うん。ごめん。だって」

謝りながらも、まだチエルシーの声には笑いが含まれていた。

「まさか先生が寝坊するなんて、ありえないでしょ？」

「…まあね」

チエルシーの言う通りである。返す言葉もなく、アーシエは部屋の中を見回した。

「デュランカリスの魔法書だったよね」

「そうそう」

「昨日、ちよつど最終章が終わったばかりだからまだここにあると思っただけど」

テーブルの上も、それ以外の場所も雑然としていた。本や紙があちこちに積み上げられ、何がなんだかわからなかったが…

「あつた」

目的のものは、テーブルの上であつさり見つかった。昨日と置場所が変わっていないということは、そのままにしていたのだろう。黒い革の表紙の本を取り上げると、チエルシーに渡す。

「ありがと。図書館にいったら一冊も残ってなかったから助かったわ」

チエルシーは、黒い瞳を細めると受け取って胸に抱きかかえた。

「じゃあね」

「うん」

チエルシーが、手をひらひらさせながら部屋を出て行くのを見送ると、アーシエは腕組みをしてベッドで眠りこけているウイズを睨みつけた。睨んだだけで起こすことができたなら、それはすごい才能だと思いが残念ながらアーシエにはそんな力はない。アーシエは、ふうと息をつくとき、ウイズが起きるまで待つことにした。暇なので、何か本でも読もうと本棚の前に行くが面白そうなものがない。ふと、さっきのテーブルを見ると、ごちゃごちゃと積み重ねられている本や書類の一番下に黄色の四角いものが見えた。どうやら、本のようなものである。引っ張り出して見ると、ウイズの部屋にあるにしては珍しく真新しかった。

「何の本だろ？」

ハードカバーで革製の表紙としつかりした装丁の本だが、タイトルが書かれていない。鍵がついていたようだが、引きちぎられたかのようにとれてきた。

魔法書か何かだろうか？

アーシエは、首を傾げながら表紙を開いた。

途端。

突風がアーシエを襲った。

(なに?)

驚いたせいで、本を床に落としてしまう。落ち方が悪かったのか、本はちょうど真ん中あたりのページを開いた状態だった。そして風はその中から吹き出していた。

ぽかん、としているアーシエの目の前で、風はどんどん強くなつていく。本の中から何かが突出していた。木の棒のようなものだ。「うーん」

何かうるさいな。と平和そうにうめく声がベッドのほうから聞こえたが、アーシエは本から目が離せなかった。木の棒がぐらぐらと上下左右揺れ動いている。引っこ抜けそうで引っこ抜けない。アーシエの目にはそう見えた。

あれが抜けたらどうなるのか。何が出てくるのか。

「・・・ええと、たぶん本を閉じれば」

深く考えるよりも先に、常識的な対処法が口から出ていた。

魔法には魔法で。道具には道具で。元に戻せるなら戻せ。できないなら破壊しろ。

(早くしないと、何かいろいろ出てきそう)

風には砂粒が混じっていた。それから目を守るために、左手を目の上にかざす。

(障壁の作り方はまだ理論しか習ってない)

防ぎきれない砂粒が目に入ってくる。

(どうして一番先に教えてくれないんだろ。教えてくれさえすれば、保健室が満杯になんてならないのに)

今すぐ目から砂粒を追い出してしまいたいのをこらえて、アーシエは本にゆっくりと空いている右手を伸ばした。手のひらにも容赦なく吹きつけてくる風が痛い。

本から突き出している棒は、斜めに傾きつつあった。回りこんで距離を取ると、アーシエは改めて手を伸ばした。

(あと、ちょっと)

本の表紙側に手がかかる。そのまま持ち上げて閉じようとしたときだった。

吹き上げる風の勢いが急に強くなったかと思えば、木の棒が綺麗に引っこ抜けて。

「なにやってん

」

そこでなぜか起きた師が、寝ていたときと同じように平和な調子で口を開いて。

ゴツ、という効果音のあと、ベッドに仰向けに転がった。

そのうえには、よくわからないものたち(簡単にいうとガラクタというやつなのだろう)が積もった。

ここは一体どこなのだろう?と思うような光景が部屋の中に広がっていた。

カーテンは砂と雪で無残な姿に。壁には、ナイフやフォークが何かの飾りかのように突き刺さっていて。薄汚れた鍋やらベッドのマットやら・・・そういつたガラクタが本の周りに積み重なっている。時折、思い出したかのように師の上にも。

直接的に本に触れることができないのなら、間接的に触れるしかない。もたれていた壁からアーシエは体を離れた。

もう一度。そう、もう一度だ。

魔法を使うために集中しようとして、何かが耳の横をかすめていった音にため息をつく。ダメだ。さっきから同じことの繰り返しである。

(勝手に触った私が悪いんだけど・・・そろそろどうにもならない状態かも)

ひゅん、と鋭い音がしたかと思うと壁がものすごい音を立てた。

また新たにフォークが突き刺さったのだ。奇跡的にどういうわけか

師が埋もれているガラクタの上にそういったものは降り注いでいない。けれど、いつそうなるかはわからない。

(師匠は強いけど、気絶した状態で身を守るといえるのはできないだろうし。 よし)

アーシエは、とりあえず部屋から逃げることにした。ガラクタに埋もれている師のもとへ行くと、急いでガラクタをのける。やがて現れた師は、無事そうだった。「うーん」とうめいてはいたが。

アーシエは、師を揺さぶった。

「師匠、起きてください！」

今まで、こんな切羽詰まった状況で起こしたことはない。いつも、のんびりと待っているだけだった。師が背伸びをして起き上がるのを。しかし、今は違う。起きないことにひどく苛立ちを覚える。

「師匠！大変なんですっ」

言葉を変えて揺さぶるが、反応はなし。

「もう！」

起こすのをあきらめて、師の足首を掴んだその時。

アーシエは、ふと本に目を向けていた。

(なんで)

そのタイミングだったのかはわからないが。

本の中から勢いよく飛び出してきた、それ。天井付近まで浮かんだそれは、大きな影をアーシエたちの上に作りながら落ちてきたのだ。

効果があるであろう呪文も、悲鳴も何もかもが消えうせた。

見習いだけど、魔女だっというのに。何をやっているの？脳裏で冷静に呟く声が聞こえる。

次に聞こえたのは、寝起きそのものの低い声。

しかも、ひどく短くて攻撃的だった。

『砕ける』

一瞬後、ベッドを中心に砂埃が舞った。

「ええと、すみませんでした」

アーシエは、砂（岩が粉々に砕けた結果のものである）まみれになりながらも、ぺこりと頭を下げた。

「なにをやってるんだか」

師が、むっくりと起き上がる。その有様はといえば、アーシエよりもひどかった。砂まみれも砂まみれである。黒いローブも、砂でぐちゃぐちゃになっていた。

師は顔をぬぐうと（あまり意味がなかったが）ベッドから軽く身を乗り出した。その姿勢のまま、右手で頬杖をついてつぶやく。

「だいぶおさまったな」

師の言うとおり、本からは小さな石ころや木の枝が時々飛び出してくるだけになっていた。風も弱くなっている。

「何なんですか？」

疑問の声を上げると、師は「うーん」と唸ってから言った。

「元カノが置いてったもの」

「え？」

「別れた次の日の朝、これが机の上にあっただけだな、開けたら何か起きそうな気がしたからそのままにした。当たってたな。

あいつ、怒って出て行ったから。部屋の半分を壊したから気が済んだかと思ってたよ」

「・・・何でそういうものを取っておくんですか」

「捨てても部屋の中に戻ってくるんだよ。たぶん、あいつがやってたんだろ」

昔のことだからだろうか、どこか他人事のように話す師に、アーシエは黒いとんがり帽子についた砂を払いつつ言った。

「その『あいつ』が誰なのか知りませんが、師匠がたぶん悪いんだと思います」

「は？」

「だって、師匠のことをそれだけ好きだったんじゃないでしょうか。そこまで言うと、アーシエはベッドから降りた。帽子についた砂はまだ完全にとれていなかったが、今度はローブについた砂を払う。粒子が細かすぎて、うまく取れない。

師は、数秒沈黙していた。背後から妙な緊張感が伝わってくるのを感じたが、アーシエは無視した。

「・・・お前さ、好きなやつというか彼氏でもできたのか？」

「はあ？」

無視するつもりだったのが無視できないことを聞かれ、何の冗談かと振り返る。砂を払っていた手も止まる。

「この間、チエルシーに借りた小説の展開に似てたんですよ。主人公の娘が言ったセリフなんです。『それだけ好きだったんじゃないか』って」

「何だよそれ」

頬杖をついているせいか、師の顔は少し歪んで見えた。

「面白くない」

付け足された一言は、本当にそう思っているかのような口ぶりだった。アーシエは肩をすくめる。

「彼氏だとか、好きな人だとかここでできたってしょうがないじゃないですか。いつかはみんな出ていくのに」

師からは、思いつきりため息をつかれたがアーシエは全く気にしなかった。それよりも。

「防御の魔法を教えてください。手も足も出ないのは嫌です」
そういうもののほうが大切なのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2419/>

眠りの国の王子と魔女

2011年11月24日01時47分発行